

# 国木田独歩の

## 佐伯での生活

(二十六)

山内武麒

(賛助会員)

佐伯市城下東町)

次に

水谷真熊君から昨夜来状、今朝返事を書く。彼は東亜学院へ入ったと報らせてきた。自分は戒めて云ってやった。過激な人は自動的になるうとしてどうかすると他動的になるものである。この間に言うに言われぬ人間の微妙なものがある。と。

田村三治君に返事を書く。

今日、英雄論の「予言者」の部を読んだ。

五日の夕方近松のおさん茂兵衛を読んだ。

自分の身が過去の人の世の中で呼吸するようであった。

自分の父祖の呼吸に接するようであった。

五日の夜、六日の遠行の際、みんなのために話そうと色々と考えたが、色々と浮かんで心の中が炎のようになり、どれをどう話したらよいかわからなくなってしまった。

と、ある。

次に

嗚呼吾に一室の閑書齋と、二、三の良友を与へよ。

と、これが自分がこの世でうける一番の幸福である。

この他のもの世の中が与えることのできないもので、自分の霊が独りで自分から求めて得ることの出来るものである。

鬱勃として宇宙を睨視し、昂然として心魂躍る。時に悚然として自然の大力を懼る。

嗚呼人生！ 人生！ 人類！ 人類！

思ふこと愈々多くして感愈々深し。

と、記してある。

八日の記

今朝天曇りて水蒸気四方の山に漠々たり。空氣沈靜にして風物自から感慨の種となる。木魚の響、何処よりか来り、蛙声処々にふつゝかになく。心楽しからず心底に涙あり。

と、霧のたちこめた朝の気分を描写している。

九日

今朝「竹取物語」の新体詩の其一を作る。

今日は中桐確太郎君から来状。

昨夕は仲の谷（岡の谷）を独りで散歩し、今夕は収二と散歩した。

次に詩を記してある。

来れ真実の生命よ

真実の希望よ、吾が命よ

吾が心は鼓動しつゝあるなり。

此の大宇宙は吾をかこみ

人類の生滅、歴史の事實は

吾を大呼す

吾は人として始めて天の下に立ちぬ。

吾は始めて自然の児となりたる思あり。

吾は求めつゝある也。世の光を。

人々は苦しみつゝある也。吾は救はん

十日の記は詩である。

吾ならぬ大界、恐ろしき法則、

吾事實の前にをどろく

吾は吾なり、吾吾を感じず、

大界を感じず、そもやそも

大界の心如何、

大界と吾と何關係ぞ

来れ真実の生命よ

妄想よ去れ、吾爾を置る。

星よ、吾となれ、花よ吾となれ

さらば吾まことに天のものとなりえん。

地よ、地よ、地の心如何、

歴史は地上の幻か。

大界は無限なり

無限！不思議なる言葉。

されどこれ事實なり

墳墓は大なる事實なり

吾は吾の最大の事實なり

吾、此等の事實の前にをのゝく

されど美！ 情！

嗚呼神よ。真の命来れ！

楽め、楽め、安んぜよ

人の心を樂しめよ。

樂はゆう顔だなの下すゞみ

人の心を樂しめよ。

命なれ、これど眞の命なれ

嗚呼吾今ま坐して此書を播く。

深けゆく夜の静けさよ。

想ひ見る、山山谷谷、大空や

静けき夜はさめぬらん。

聞けや、見よやはてしなき自然の声と色を。

不思議の力の法則を見よ、

而も聞け人の声を

魂の声を。

此の文みはこれ人の声。

此の世にありしたまの声。

吾れ亦た此世に茲に在り。

吾れ亦たかれのごと茲に消へん

魂の声を聞け。

嗚呼たゞ人の天に向けたる声を聞け、

吾が心をどりをのゝく。吾はしも

此の世に生れし人なるを思へば

雨、泉、月、星、花！

鳥や虫やなれ達も此世のうちのものなれや

吾も此の自然のものなりけり。

サテもサテまことの命願くは来れ。

神にいのる、まごゝろこめて祈る也

願くは眞の光と望と来れ。

#### 十二日の記

昨夜、尋常小学校に会合した

会合したのは富永徳磨、尾間明、高橋平吉と収二、と

自分と飯沼君の六人であった。

飯沼君の宿直を幸に密会したのである。話し合つたこと

は上京の一件である。

そして 次に

夜、暗澹としてもものすごく時に雨沛然として至る。

会する所はすなはち旧城主の殿、会するものは為すあ

らんとて日本を舞台として前途を夢想し、今日に扼腕

する少年青年血氣の人々

と、この晩の会合の雰圍氣を叙してある。

この晩の会合のことは尾間日記にも記してある。

八時四十分から教会へ行き、十時十分に散会して尋常小学校へ行く。飯沼君が宿直であつた。会したのは国木田兄弟・富永・並河と共に六人。皆この秋に上京する有志である。会して飯沼君の上京について熟議したが、飯沼は自分もこの上京のことは大賛成であるが、自分には二つの難点がある。一つは脚気にかかりやすいこと、一つは家庭上のことである。といふので、十分に考慮することにした。

と、ある。飯沼は結局上京を断念したのである。

次に詩がある。

今や吾却て自から獄屋のうちに投ぜんとす。

吾、吾を知らず、存在の事実を知らず

此の吾をとりまく宇宙を感ぜず

只だ只だ少年浮世の妄想を楽しみける時は

此身此心却て自由なりき。

吾をも知らず宇宙をも知らず

思ひは只だ慾望自然のまゝなりき。

今は然らず、嗚呼今は知らず。

夢の世にせよ、現の世にせよ。

まほろしにせよ、うたかたにせよ、

吾はあくまで吾にして宇宙はあくまで宇宙なり。

生くも死ぬるも同じ事

もがくも笑ふも同じ事

吾、吾を忘れ得ず又た宇宙を忘れ得ず。

事實は、然り存在の事實は消へざる火の如く

吾が心根に徴し来る。

嗚呼自由よ来れ自由よ来れ

希くは信仰の自由よ来れ

然らずんば吾は詛はれたるもの也

何となれば己に己に此事實を一度び感じたれば也

一度び感ず、己に忘る可からず。

故に信仰の自由よ来れ

然ずんば我は無限の牢獄のうちに坐せん。

宇宙は直ちに、獄屋となり

吾は吾の鉄鎖とならん。

死も力なし。かゝる時に死も力なし。

故に来れ信仰の自由よ。

されど吾、人情を信ず、情を感ず

吾、情を信ずる時無限の自由を感ず、

情は神の心ならまし。

美や情の源ならまし。

情や情、高き情よ、涙の情や来れ！

神のなぐさめよ来れ！

吾只だ爾を信ず、吾自由なり。

次に

自分の智は渴いた口のものである。情は燃ゆる火のようである。

この渴を是非ともいやさねばならない。是非ともこの情を静めて清く深い淵のように安らげくすることを願う

見よ、雨はれて夕陽美なり。吾茲に坐す、

今吾茲に坐す。夜は来り、窓外月白ろし

自分は存在の事実を痛感した時、自分の生涯ではじめて巖然とした事実となる。

今ここに坐している。日本の戯曲を読んでわが祖先の生活の事実を感じ、また時というものを感じる。ヨブ記を読んで大昔の感情の人の熱信と真情を思い、またその存在の事実に驚く。昨日ファウストを読んだ。これは近代のヨブ記ではあるまいか。

聞けよ、見よ、悉く存在の事実の深い声でないものは

ない。

今夕、谷に散歩す、新月梢に在り、溪流地に在り、森の暗黒く草の露玉の如し、自然と吾と存す、吾は自然のうちに在り、自然は吾のうちに在るや、否や  
と、記してある。

十三日の記には

昨夜、夜や、更けて独り仲の谷を散歩す。

と、記して、次にこの散歩で得た感慨の詩を書いてある

爾、人よ妄想の世界より脱せんと思はゞ

夜更けて独り山林の間を歩め

慣習の衣を擺脱せんと思はゞ

月光を踏んで独り寂莫の谷を歩め

独り静かにこみちを歩め、

蛙の声処々に水田のあぜにかまびすし、

されどこれ人間ならぬものの声を聞け。

独り静かに谷川そふて歩め

水に月うつりて、光美なり

されどこれ人間のそとなる物の光と見よ

爾が歩みは遂に累々たる墓地の傍を過ぎん

人！ 然りこゝにこそ人自からの仲間は無なる

天と地と静かに呼吸す、爾独りそこに立つ。

人なる爾、今將た如何。

嗚呼吾何故にかく恐るゝか、恐るゝ心！

これ何の心ぞ、何の恐れぞ

谷間に独り歩む、何の故にかくはをのゝく

自然！ 吾は自然を恐るゝか

寂寞！ 吾は寂寞を恐るゝか

死！ 運命！ 不幸！ これ吾の恐か

自然！ 只だ冷然たる大空の虚か、聴けよ蛙、草の

かげになき

老鼻森のかげに叫ぶ

吾は人！ 嗚呼人！ 此の自然！

自然と人と何の隔やある、

吾、古墳の傍に立つ時に戦慄を感ず、

古墳、新墓何の故に恐ろしき

此の下に死の骨と死の蛆蟲と在り

人はあらず、人何処にゆきし。

吾在り、吾生きて在り、此の地上に在り。

此の自然此の乾坤に此の存在は何ぞ

自然自然無限の自然よ

月の光よ、星かげよ、此のこゝろに語れ

嗚呼、寂寞の自然よ、

吾爾と交はる時に於てはじめて妄想の世界を脱す

寂寞の自然、吾爾のうちにあゆまん。

と、ある。夜更けて一人月光の下を伸の谷（岡の谷）を

散歩したときの感懐である。独歩はこの谷に寂寞の谷と

云う名をつけ、散歩の道としていた。

次に

地上での生命は忽ちのうちに逝ってしまう。何を考え

てぐずぐずしているのか。

自分は予言者として、詩人として、また教師としてこ

の世界に送られたのである。自分は深くそのように信じて

いる。自分自身でこのように感じている。

此自然！ 神は吾に命じて曰く

爾は予言者、詩人としてあれと。

否な否な、吾は此の外に在る能はざる也

過去の人を考へてこの天地を見、將來の人を思つてこ

の大自然を直覚し、そして更に考へる。

嗚呼「タイム」何ものぞ、吾が精神は鼓動し来る也

と、予言者、詩人となることを自分の理想と考えている。

#### 十四日

犬の生活を見よ。何とにぶいことよ。たゞ眠り、歩き、臭ぎ食い、吠え、そして老いる。老いることを知らないのである。そして死ぬ。死ぬことを知らないのである。あゝこれが犬の一生である。

生命、而して死亡！ 生存、而して空々！  
である。

人間の生命もその大部分はこの犬の生命と何の変りもない。変りないことをどうすることもできない。これがこの世の事実であることをどうしようもない。

人であるわれらはこの事実を不問に付しておくことは出来ない。

その意味を知りたいと強く願っている。

この世のこの生命、どんな意味をもつか。

と、生命の意義を問うている。

次に

わが国の今日の形勢は実にこの自分をして雄心を勃々と起さしめるものがある。政界に文学界に、又宗教界に

この大丈夫が大に力をふるうべき時である。しかし自分  
はじつと辛抱しよう。

立上がつて時難に当るのは男子の本懐である。しかし  
自分はじつと忍ぶ。自分の立つ舞台は精神の世界のみで  
ある。わが神から命じられた義務はこれである。自分は  
そうだと確信している。自分の子供時代の生い立ちより  
その後の傾向と世界の精神界の歴史などから考える時  
益々そのように信じる。自分はこの義務を誇りとする。  
この義務を尽くすため世の中でもっとも小さいもの  
なつても安んじる。

是れ神が命じ給ひたる義務なれば也。

と、自分の神より与えられた義務はこの世の精神界に  
尽くすことであると強く自覚している。

しかし、次に

吾が宇宙の神は人として吾に何を要求するかを考へ  
よ。

吾が心は吾が心として吾に何を要求するかと考へよ  
吾が人類の歴史は其の進歩に於て吾に何を要求する

か

吾が国は吾に何を要求するか考へよ。

と、問い直して、

しかし自分は何もわからない。どんなこれらの要求に  
応じよう。あ、何も知らない。宇宙のように茫茫として  
いる。自分の智は暗夜のようである。

と、嘆いている。

十五日の記には

一昨日の午後番匠川で舟遊び、昨夜は芝居見物をした  
ことを記してある。

一昨日は日曜日、この日の午後、収二・富永・山口・  
尾間の四人を連れて、番匠川の下流まで舟遊びをした。

昨夜は諸子と一しよに芝居見物をした。外題は朝貌日  
記、及び石井常工門であった。

その芝居の感想を次のように記してある。

過ぎにし吾国の人々の生活、社会、道徳など感じて  
感慨多し。吾等は明治の人なり、明治の人と言へば、  
同じ日本とは言ひ乍ら、幻けなきをりよりの感染甚だ  
別様にして、別世界に生れたる人の如きなり。不思議  
なるは吾が享けし運命にぞある。吾、何とて猶、五十  
年の昔には生れざりけめ。只だ五十年の後に生れ出で

たるが故に特別なる時代にな遇ひたり。

と、感じて

過去の日本、世界各国の歴史、更らに自然について言  
えば、昔ながらの不変不移の天地わが生命、この運命、  
などを考えると心が躍り、興奮する。

と、時の流転を強く感じて躍起している。

一昨日の午後の舟遊びについては富永日記にも尾間日  
記にもある。尾間日記を見ると、

昼食をすんで国木田先生の処へ行って色々話した。そ  
の時先生は上京のことを山口行一君にも報らせた方がよ  
からうと云った。それで山口行一君を誘い、富永君も一  
しよに船頭町の河岸に出て、舟を一艘借りて五人で舟を  
乗り出し大江灘に向った。舟の中で色々話し、山口君  
に上京のことを話すと、山口君は自分も上京する積りで  
あったので、そうなれば大変頼母しい。是非加えて欲し  
いと云う。それで山口に自分達の計画について話した。  
舟を大江灘の浜に着け岡に上つて散歩した。今日まで  
山口に話さずにいた心掛りが無事に丸くおさまり、愉快  
であった。

と、ある。これでいよいよ上京組は山口行一を加え、



独歩兄弟と合せて六名となったのである。

また芝居見物について富永日記には

岡木田先生が棧敷を買い、尾間・飯沼・長田・田中・収二君と八人で芝居を見た。初めに朝顔日記、あとの二幕は石井常工門吉原の段であった。

と、ある。

次に人にとって最も重大なのは人である。人は人であるからである。人とは不思議な概念である。吾は人なり吾とは何ぞや、問わずにいられない問である。

運命に安んじているのは今の自分の情である。義務はこの安心のもとに実行されている。

天を主宰する人間の神は吾に命じて、予言者になれと云う。自分の心はこれに答えて、これは自分の義務である。そして

嗚呼、瞑々、茫々、悠々、不尽無極の宇宙、宇宙、宇宙爾吾を助けよ。

と、祈っている。

星よ、月よ、花よ、鳥よ、過去の人々よ、自分とは星を見て星と言ひ、花を見て花と呼び、鳥を見て鳥よと言ひ、過去の人々を思う時は、あゝ過ぎにし人々よと云

うより外は云うことが出来ない。

山陽よ、高尾よ、石井常工門よ、マホメットよ、文覚上人よ、平家の公達よ、卿等は何処にあるか。あゝ卿等は何処にあるか、あゝわれはみんな何処へ行くのだろうか。

と、詩人となることを天命と考えているが今の自分に果して可能なものかどうかと反省して不安の念にかられている。

